

創造と成長

吉澤昌恭

I 理性は情念の奴隷である

ラッセルは、理性には完全に明晰で正確な意味がある、と言う。つまり、それは我々が達成したいと思う目的に対する正しい手段の選択に関わるのであって、目的そのものの選択とは何ら関わりを持たない、というのである。彼はその著『ヒューマン・ソサエティ』のまえがきに於いて、賛同すべきものとして、「理性は情念の奴隷であり、またそれに止まるべきである」という一節を挙げている。これは、デヴィッド・ヒュームが『人性論』の第二編第三部第三節で述べている有名な一節である。

人間を行動に駆り立てるものは情念 (passion) なのであって、理性 (reason) はそれだけでは決して行動の原因となり得ない、ということなのである。もしこのことが正しいとすれば、幸福になるためにも、或いはより良い社会を作るためにも、人間の情念がどのようなものであるか、を解明することが必要になってくる。情念に関して、しばしば見逃されてはいるが、非常に重要なある区別を行わねばならない、とラッセルは言う。つまり、衝動 (impulse) と欲望 (desire) の区別がそれである。情念は、ある人間の追求すべき目的を決定し、彼を行動に駆り立てるのではあるが、そうした目的の決定や行動が明確な意識なしに行われる時、その行動は衝動的となる。人は、怒りや憎しみに圧倒されている時、ちょっと考えさえす

* 本稿は、「懐疑、科学、哲学」(『広島経済大学研究論集』第7巻第1号、1984年4月)の続編である。

れば賢明でないことがすぐにわかるようなことをしてかすものである。そして、あとになってなぜあの時あんなことをしたんだろう、と悔むものである。これに対して、ある明確に意識された欲望が存在する場合には事情が違ってくる。この欲望を充足させるための手段が慎重に検討される。更に、衝動がこうした欲望の充足の妨げとなるような行動を喚起しそうな場合には、衝動はコントロールされる。ここに於いて初めて、理性が登場してくるのである。つまり、理性は、ある明確に意識された欲望を充足させるために、衝動によって惹起される突発的な行動を制御するに際して、威力を発揮するのである。

* * *

人間を行動へと駆り立てる唯一の源泉が情念である。しかし、情念は全てが自己中心的なものである、というわけではない。人間は非人間界にも関心を持つことができるし、しばしば、それが一人の人間にとって非常に大きな地位を占めるものである。人は自然を眺め、宇宙の神秘を探ろうとするものである。また、現在の自分とは全く関わりのない、過去の歴史的な事実に興味を抱く人もいるだろう。

自分自身に対してしか愛情を感じない人は極く稀であろう。大抵の人は自分の家族の者にも愛情を感じるであろう。多くの人は、自分の所属する集団の構成員に対しても愛情を感じるであろう。極く少数の者は人類の一人一人に愛情を感じるかもしれない。

人間には、明らかに、自分以外の者を愛する能力があるように思われる。こうした人間の他者を愛そうとする気持が強められるならば、社会はそれだけ住み良いものになるだろうし、恐らくは他者を愛そうとする人をより幸福にするだろう。

しかし、大抵の人の場合、他者を愛そうという気持はそれ程強力ではない。少なくとも他者へ向けられる愛情は、自己へ向けられる愛情程強力ではないだろう。従って、他愛心を説くだけでは、幸福にもなれなければ、

より良い社会を実現することもできない。大多数の人は自己本位 (selfishness) 以上に出られない、とラッセルは言う。それに対して、自己本位以下に転落することは容易に起り得る。人は、しばしば、何が真に自己の利益となるかを見失なう。怒りや憎悪に囚われている時は、とりわけそうである。それ故に、自己の利益をより良く判断させるものは全て役に立つ。そのことは、自己の利益をよく考えて行動する人を利するばかりではなく、社会を一層住みやすいものにする。なぜなら、怒り、憎悪、嫉妬に満ち満ちており、人々が衝動的にしか行動しないような社会は、考えるだけでも恐いものだからである。

* * *

ラッセルは、『懷疑論』の第一章で、人間についてのひとつの興味深い分類を行っている。まず第一に、道徳上の理由から自己の利益に反すると信じられていることをする人がいる。ラッセルは初期のクェーカー教徒の例を挙げている。彼らの多くは、小売店主として、自分達の商品に対して自分が喜んで受け取れる以上の代価を要求しなかった。彼らがそうしなかったのは、受け取れると思う以上のものを請求することは詐欺だと考えられたからである。しかし、顧客にとって、こうした小売店主が存在することの便宜は非常に大きかったので、誰でもが彼らの店へ買いに行き、彼らは金持になった、というのである。彼らの行動は、自分達の利益を最大にすることを狙ったものではなかったけれど、結果的には最大の利益が獲得されたのである。第二番目には、これらのことを合理的且つ意識的に考えながら、自己の利益の最大化を計ろうとする人がいる。このような人の場合にも、行動の形態は先のクェーカー教徒のそれと同じものになるだろう。勿論、彼らの行動の動機は道徳的に優れたものである、とは言えないけれども、やはり、彼らの行動は彼ら自身にも顧客にも利益をもたらすであろう。第三番目には、本能的に鋭敏で、上記のような事情を直観的に悟る人がいる。

以上のような人々の行動は、その人自身に利益をもたらすばかりか、その他の人にも利益をもたらす。しかし、大多数の人は、非常に道徳的でもなければ、鋭敏でもないし、更に自己の利益を慎重に検討することもない、とラッセルは言う。この第四のクラスに属す人々は、その意地悪さが他の全てを圧倒しているが故に、他人を破滅させようとして、結局のところ、自分自身をも破滅の道へと追いやってしまうのである。

大多数の人に、高度の道徳上の資質や本能的な鋭敏さを要求することはできないだろう。しかし、何がほんとうに自己の利益となるか、を慎重に考えながら行動する習慣を身につけてゆくことは必ずしも不可能ではないだろう。もし、こうした習慣が広まってゆくならば、社会はそれだけ住み良いものになってゆくことであろう。

II 規律と衝動

ある明確に意識された欲望を充足させるためには、どうしても多くの衝動を制御しなければならない。しかし、こうした衝動の制御には限界があるし、更にまた、衝動の抑制が行き過ぎるならば、その結果は望ましいものでなくなってしまう。衝動の抑制が厳し過ぎる場合には、そうした衝動の源たる生そのものが萎縮し、或いは枯渇してしまうかもしれない。そうした衝動の湧出が少しも感じられないような人生などは、全く生きるに値しないと言ってもいいのではないだろうか。或いはまた、行き過ぎた衝動の抑制は、より一層弊害の大きい新たな衝動を生み出すかもしれない。そしてそれが、熱せられた地下のマグマが火山の火口から吹き出してくるのと同じように、何かの契機で突然噴出してきて、全てのものを焼き尽してしまうかもしれない。

望ましいのは、衝動の抑圧ではなく、それを生命力と成長へ方向づけることである、とラッセルは言う。

ラッセルは衝動を所有衝動(*possesive impulse*)と創造衝動(*creative impulse*)とに区分する。前者は、他人と共有することができない何物かを獲

得し、或いはそれを保持することを目指す。それに対して後者は、知識、芸術或いは善意といった私的に所有されることのない、価値ある何物かを世界にもたらすことを目指す。ラッセルにとっての最良の生活とは、その大部分が様々な創造衝動に基づいて築かれた生活であり、最悪の生活とは、その大部分が所有衝動に発しているような生活なのである。従って、人々の所有衝動を減殺し、創造衝動を助長することが、目指さるべき方向となる。

こうした基本原理に基づいて、ラッセルは社会改造のための諸提言を行っており、或いはまた、幸福になるための指針を与えている。社会改造のためのラッセルの諸提言は次稿で論ずることにしたい。本稿の以下の部分では、いかにすれば幸福になれるか、についてのラッセルの見解を見ることにする。1930年に出版された、彼の『幸福論』を取り挙げることにしよう。

Ⅲ 幸福の獲得

不幸の原因には多くのものがあるが、それには社会制度に由来するものと、個人の心理に由来するものがある。ここでは前者にはふれない。食べ物と住居を確保することのできるだけの十分な収入をもち、日常の身体の活動を為し得る程十分健康であり、しかも、子供を全部亡くしてしまうとか、社会的な汚名をきせられるといった重大な破局に直面することもないのに、耐え難い不幸福感に囚われている人がいる。こうした人の不幸は誤った世界観に起因しているのである、とラッセルは言う。自分自身の不幸の自覚は容易であり、自らを悲劇の主人公に仕立て上げることには、ある種のこころよさがある。この世の中には生きるに値するものなどは存在しないし、このことを痛切に認識しているが故に、それだけ一層私の不幸は大きい、というわけなのである。

ラッセルは、豚肉をおいしいソーセージにするために作られた、二つの精巧なソーセージ機械について語る。一方の機械は、豚に対する非常に熱

意を持っていて、無数のソーセージを製造した。それに対して、もう一方の機械は次の如くに言うのであった―「わしにとって豚なんぞなんだというのだ。わしの仕事は、豚なんぞよりはるかに面白く、はるかに素晴らしいんだ。」その機械は豚を拒否して、自分の内部を研究し始めた。ところが豚肉が入ってなくなると共に、その機械の内部は働くことを止めてしまった。その内部を研究すればする程、それが空っぽで、そしてばからしいものに見えてきた。それまで素晴らしい加工を行なって、おいしいものを作ってきた精巧な装置もびたりと止ってしまった。そして遂に、第二の機械は、自分には何ができるのかを考えて途方にくれてしまったのである。

この世の中には価値あるものなどは何も存在しない、と言い張って、自己の内部にのみ注意を向けている人は、特に注目に値するようなものを何ひとつ発見することがない。心の転換を計ることが必要である。自己没入をやめて、自分の注意を外界の事物に集中することが必要である。人と物に対して、幅広く、好意的に関心を持つことが、誤った世界観に由来する不幸福感を癒すための最大の良薬なのである。興味を持つものが多ければ多い程、幸福を得られる機会が多くなり、運命に翻弄されることが少なくなる。なぜなら、もし一つを失っても、もう一つがあるからである。

いちごが好きで人と、そうでない人とを比べてみよう。後者の方が優れている、ということを証明し得るような、いかなる客観的な論拠も存在しないように思われる。いちご好きの人にとっていちごは良いものであり、嫌いな人にとっては決して良いものではない。しかし、いちご好きの間は、いちごが好きでない人が味わうことのできない喜びを味わい得るのであり、その限りに於いて、彼の人生はより一層楽しみに満ちた人生となるのである。

* * *

外界の事物に対して、幅広く、好意的な関心を持つことが、幸福へ到る

道なのである。外界の多くの事物と良好な関係を保つことができれば、それだけ幸福になる機会もふえてくる。とりわけ、多くの人との間に良好な関係を維持することができて、更に自分の仕事に熱意を持って取り組むことができるならば、その人の幸福はより確実なものとなる。

ラッセルは、幸福な人達の最も普遍的な特徴は熱意 (zest) である、と言う。多くの事物に熱意を持って対応することが、幸福へ到る近道なのである。この熱意が欠けてくる主要な原因の一つが、自分は誰からも愛されていないという感情である。それに対して、愛されているという感情は、他の何物にも増して熱意を増進させる。とはいっても、他人からの愛情は努力することによって獲得できる類のものではない。愛情をかちとろうとして為される必死の努力は、大多数の場合、報いられることがないだろう。他人の愛情をつなぎとめようとして親切な行動をする人の動機は、その親切を受けた人達によって易々と見破られてしまうからである。こうした行動に出る人は、いずれ人間の忘恩を経験し、幻滅の悲哀を感じるようになる。

人間というものは、愛情をあまり要求していないように見える人に対して最大の愛情を注ぐものようである。他人から愛されるということにはあまり頓着せず、自信を持って人生に臨み、他の人々に対して、好奇心を持つと同時に、愛情を感じる人は幸福である。彼は他の人々に愛情を与え、安心感を与える。彼と接する人は愉快的気分させられる。当然、彼は多くの人に愛されることとなる。このことは彼の自信と熱意を増進させ、他人への愛情をより大きなものにし、そして、多くの人々との関係をより良好で、より強固なものにしてゆくことであろう。

仕事が幸福の原因となるか、それとも不幸の原因となるかは、一義的に決定することのできない問題である。世の中には全くうんざりさせられるような仕事がたくさんあるし、仕事が多過ぎる場合にはとても幸福にはなれないからである。とはいっても、最も退屈な仕事でも、その分量が多過ぎなければ、大抵の人にとっては仕事がなくてぶらぶらしているよりも苦

痛ではない、とラッセルは言う。しなければならない仕事があれば、それは一日の内の相当の時間をつぶしてくれる。全ての人が、自分の時間を好きなように使えと言われて、直ちに、するだけの価値のあることを考えつくとは限らないのであるから、仕事は、何をしようか、という思い煩いから多くの人を解放してくれる。こうして、仕事は退屈になることを防いでくれる。更にまた、仕事は巡ってくる休日を非常に楽しいものにしてくれる。

全ての仕事がこういった類のものであるわけでは決してない。仕事の中には最も深い喜びを与えてくれるものもある。

何か並はずれた技能を身につけた人は、その技能を発揮させることによって、難局を乗り切るならば、そのことによって愉快的気分になれるだろう。また、これに競争的な要素が付け加わるならば、その喜びは倍加するに相違ない。つまり、熟練した敵の裏をかこうとして、それに成功するならば、自らの技能を行使することから得られる喜びもひとしおであろう。幸いにも、我々の住むこの世界に於いては、様々な新しい事情が新しい技能を必要ならしめ、人がともかくも中年に達するまで、その技能を向上させ続けてゆくことのできる多くの仕事が存在する。

仕事には非常に好ましいもう一つの側面がある。そしてそれは、技能を発揮すること以上に、幸福に大きく寄与することができる。即ち、建設という側面がそれである。ある種の仕事に於いては、その仕事が完成されたあかつきに、永遠に記念碑として残るような何かが作り上げられる。このような建設から得られる喜びは非常に大きなものであるに相違ない。勿論、破壊ということの中にも喜びが有るということは否定できないし、また、その喜びは極めて強烈なものであろう。しかし、その喜びはあまり深い満足を与えるようなものでもなければ、永続きするものでもない。なぜなら、破壊がもたらす結果は、決してそれ自体として満足し得るようなものではないし、何よりも、自らの敵を破壊し尽くした後には、為すべき何事も残らなくなるからである。勝利の感覚も早晩消えてゆくに相違ない。それに対して、建設の仕事は、ひとたび成就されるならば、あらためて考

えてみても楽しいものである。更に重要なことは、もはや何一つ手を加える必要もない程に、全てのことが完全に出来上ってしまうということは決してない、ということこれである。一つの成功からまた次の成功へと、際限もなく進んでゆくことから得られる満足は、他の何物にもまして大きなものであろう。

建設的な仕事に取り組むことは、また、憎悪や嫉妬の習慣を治癒する最大の良薬である。憎悪や嫉妬の感情が少なければ少ない程、その人の対人関係はそれだけ良好なものとなり、その人の幸福はそれだけ確実なものとなってゆく。

自尊心なくしては、真の幸福はほとんど有り得ない。そして、自分の仕事を恥じている人が十分自尊心を持てる、という可能性は皆無に近いだろう。

* * *

幸福であり続けるためには、中庸の徳は欠かすことができない。

外界の多くの事物に熱意を持って対処することが幸福になるための秘訣である。しかし、ある特定の事物に対する熱意が桁外れのものになるならば、その結果は決して望ましいものとはならない。個々の事物に対する熱意が不幸の源とならないためには、それらがきちんと組み込まれるべき枠組が必要となる。健康であること、普通一般の能力に欠けないこと、必要なものを買うのに困らないだけの収入があること、妻子に対する義務といった類の、最も本質的な社会的義務を果たすこと、等がそれである。他の全てを犠牲にしてまで何かあることに過度に耽溺することは、決して賢明なことでもなければ、幸福をもたらすものでもない。

中庸の徳は、努力とまかせせる境地との間のバランスに関しても、重要である。回避可能な不幸を防止するために努力することは、幸福になるためには絶対に必要なことである。人間の努力によって防止し得るような不幸の下にわざわざ坐していることは、決して賢明なことではない。しかし、

自分にできる最善の努力をした後は運命にまかせる、という気持が大事である。どうしても避けることのできない不幸に時間を費し、くよくよと思いつくのはばかっている。人間は死すべきものである。死というものは決して喜ばしいものではない。しかし、死というものについて考察し、それなりに踏ん切りをつけた後では、もはやいつまでも死についてくよくよと思いつくべきではない。

或いはまた、ほんの小さなトラブルをも我慢することができなくて、それに対して莫大なエネルギーを消耗することも決して賢明なことではない。汽車に乗り遅れても、昼食の料理がまずくても、クリーニングに出した洗濯物が帰ってこなくても、こんなことは全く些細なことである。こんなことに対してくよくよ思い悩んだり、そのことによって不気嫌になり、いらいらしても、何の役にも立たないのである。

まかせる境地というものは、自分自身についての真実に自ら進んで直面することによって得られる。それは初めのうちは苦痛ではあろうが、結局のところ、真実に面と向おうとしないで自らを欺こうとする者が陥りがちな絶望や幻滅から我々を守ってくれる。毎日毎日、だんだんと信じられなくなってゆく事柄を、毎日毎日信じ込もうとして努めることぐらい疲れることはない。また、それ程腹だたしいことはない。こんなことをやめてしまふことこそ、確実に永続きのする幸福を手に入れるための不可欠の条件である。

* * *

不幸な人はだいたい不幸な信条を選び、幸福な人は幸福な信条を選ぶ、とラッセルは言う。しかし、外的な事情が決定的に不幸なものでない限り、情熱と興味を内部へではなく、外部へ向けさえすれば幸福を手にすることができる。

ラッセルによれば、幸福な人とは次の様な人である。

幸福な人とは、客観的な生き方をする人である。自由な愛情を持ち、広

きにわたって興味を持つ人である。彼はこうした愛情と興味とによって自らの幸福を確かなものにする。このことによって、今度は彼自身が多くの人々の愛情と興味の対象となる。そして、このことが彼の幸福を一層確かなものにする。彼は愛情を与える人であって、そのことの故に愛情を与えられる人でもある。

幸福な人とは、パーソナリティの分裂に悩むこともなく、また、世界に対して抗おうなどしない人である。彼は自分自身を宇宙の市民と感じ、宇宙が見せてくれる景観を自由に楽しみ、宇宙が与えてくれる喜びを十分に享受する。彼は、自分自身と自らの後から来る子孫とが全く別物であるとは感じていないが故に、死のことを考えて思い悩むこともない。生命の流れとの、そのような深い本能的な結合にこそ、最大の喜びを見出し得るのである。

本稿は主として、バートランド・ラッセルの下記の著作に依拠して作成されたものである。

1. 市井三郎訳「社会改造の諸原理」〔『世界の大思想26, ラッセル』, 河出書房新社, 昭和44年〕(Principles of Social Reconstruction, 1916)
2. 日高一輝訳『幸福論』, 講談社文庫, 昭和47年 (The Conquest of Happiness, 1930)
3. 柿村峻訳『懐疑論』, 角川文庫, 昭和40年 (Sceptical Essays, 1935)―第一章
4. 勝部・長谷川訳『ヒューマン・ソサエティー倫理学から政治学へ』, 玉川大学出版部, 昭和56年 (Human Society in Ethics and Politics, 1954)